

稲賀繁美（異文化触変論・知的植民地主義批判）

かつて文学史とは著者の批評眼を通した名作梗概だった。いまやそれは、時代の地層が宿す変成と褶曲の断層撮影装置となった。1 橋本恭子『『華麗島文学志』とその時代——比較文学者島田謹二の台湾体験』（三元社）、2 デンニツァ・ガブラコヴァ『雑草の夢——近代日本における「故郷」と「希望」』（世織書房）、3 池田浩士『「海外進出文学」論〈第II部〉石炭の文学史』（インパクト出版会）を併読する。台湾の日本占領時代に為政者側学究は何を忌避したのか。名づけを拒む作品はいかにニッチに繁茂するのか。そして地底の抑圧はいかに地表に傷痕となって露呈するのか。4 堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』（名古屋大学出版会）は「戦争メガフォン」と唾棄された詩人を国際関係の軋轢のうえに召喚する。D・ダムロッシュ『世界文学とは何か？』（国書刊行会）提唱の「二重焦点・楕円モデル」や「オシツオサレツ」双頭動物の葛藤に、G・ディディ＝ユベルマン『イメージの前で』（江澤健一郎訳）、『時間の前で』（小野康男・三小田祥久訳、ともに法政大学出版局）の図像抑圧・編年秩序批判を重ねた位相が5 水野千依『イメージの地層——ルネサンスの図像文化における奇跡・分身・予言』（名古屋大学出版会）の彼方に望見できる。この刷新された地層図の上に6 ボッカッチョ『デカメロン』（平川祐弘訳、河出書房新社）の「風俗壊乱」が再生を遂げるはずだ。上半期の機会を逸したので、以上六冊を凝縮した。